

奨学修了報告書～中国が都になるまで住んでみた～

高橋あすみ

みなさんこんにちは！高橋あすみです。7月、約10ヶ月間の留学生活がついに終了しました。私は現在、日本帰国前にアジア諸国を周りながらこの報告書を執筆しています。私にとって初めての海外で「生活する」と言えるほどの長期間滞在は、十分すぎるほど多くの学びや非常に濃い経験をもたらしてくれました。今は中国を離れて約2ヶ月が経過しましたが、中国に留学に来たばかりの頃の苦労や衝撃、その時の刺激や感情など、中国で経験したこと全てがとても懐かしく感じられます。今回は、今までのミニレポートの総括として、この10ヶ月を振り返りながら、この留学で得た学びやそこから感じたことについて共有したいと思います。

まず、個人的な話にはなりますが、私の経歴や山西省への留学を考え始めたきっかけ、私という人間について、最初にお話したいと思います。私は現在大学を卒業済みの24歳です。大学にストレートで入学・卒業した後、同級生が皆社会人1年目と新しい人生の一步を踏み出す中、新卒就活をやめて、9月から中国へ留学することを決断し、進路を変更しました。私は、元々ハーフやクォーターなど中国にルーツのある血縁でもなければ、中国の文化や歴史に特別な知識がある人間でもありません。中国に興味を持ったり中国語を学ぼうと思ったことも、大学3年生まではありませんでした。ただ、留学自体には昔から関心があり、様々な理由でその実現を先送りにしながらも、やはり諦めきれず「いつか行きたい」と何年もぼんやり考えていました。しかし、ただ考えているだけで行動することではなく、大学3年生の11月まで海外に行ったこともありませんでした。中国に初めて興味を持ったのは、大学3年生の3月、副専攻していたカリキュラムの一環で、中国の福建省へ訪問した時でした。ほぼ初めての海外で、今まで留学生との交流さえほとんどなかった私に、急にたくさん中国人の友達ができました。初めて本格的な中華料理を体験し、歴史的な名所へ連れて行ってもらい、日本語を学習する中国人学生と、言語学習やそれ以外の場面でも交流しました。2週間の訪中が終わり日本に帰国してから、その2週間で自分が経験したことやその時の感情を忘れることができませんでした。また中国に行きたいと考えた私は、大学4年生の1年間、3回学内外で募集している訪中プログラムに参加しました。そのうちに、中国に行きたい、人々や文化に触れたい、彼らが日本語を勉強するように、私も中国語も話せるようになりたい、そうしたら彼らともっと深い話ができてきっと楽しいだろう、と強く思うようになりました。中国語は全くできませんでしたが、週に2

回、一年生と共に入門レベルの授業を履修するようになりました。山西省はその際に初めて訪れ、この派遣事業の存在もその時に知りました。

しかしそれと同時に、やはり世間から見た日中関係はあまりいいものとは言えませんでした。その時期にも中国でのいくつかの事件が日本でも話題になり、訪中のたびに周囲の人から何度も訪中をやめるように言われたり、ネットではよくないイメージやそれに関する言葉がよく見受けられました。しかし、それと同時期に私は中国の面白さを知り、中国人との交流を深め、批判的な流れとは全く反対の方向に進んでいました。そして、政治や国勢ではなく、人と人、言葉でつながり内面を知る、そういった方法でお互いに理解し、一つの別の架け橋ができることを学びました。そして私もそんな活動の一端に関わりたいと考え、大学卒業後、この事業に参加し、その土台として言語を学ぶことを考え始めました。日本で新卒就活を辞めて別の道へ進むということが、その後の就職を考えた際にどれだけ大きな苦勞を招くか、調べればその道は勧めないという意見ばかりが出てきました。しかし、私はこのまま社会人になる前に中国での生活、留学を諦めることはできないという強い思いがありました。山西大学への派遣事業に応募を決めたのは、卒論が山場を迎える大学4年生の10月下旬のことでした。長い間1人で応募するか悩んでいましたが、応募締め切りの11月7日が直前まで迫り、悩んでいるだけではこれまでと同じだと心を決め、卒論の担当教授に推薦状の作成をお願いしたことをよく覚えています。結果、私は新卒就職という道をいったん手放して、この留学を選んだことを全く後悔していません。語学や文化など表面的な言葉だけではなく、その真髄にあるものを多く学べたと感じています。

さて、そのような経緯で、私は大学卒業後に中国語の学習と交流から中国文化への理解を深めるという目的で、山西省に10ヶ月留学することとなりました。では、留学終了後、中国語能力は実際にどのくらい向上したのでしょうか。以前もレポートに書いたことがありますが、留学前の私の中国語レベルはHSK1～2級、入門～超初心者レベルでした。この事業に参加する多くの人が語学生として山西大学に留学しているようなので、言語能力の変化は多くの人が気にする結果かもしれません。結論、留学終了後の現在、私は基礎四部門の総合的な中国語能力がHSK5級レベル、読み書きのみの場合はHSK6級レベルに達したと考えています。HSK5級レベルというと、新聞やスピーチが理解できる水準だということは以前のレポートでもお話ししましたが、読み書きのみに限ると専門的な単語や話の流れも掴みやすく、HSK6級の過去問題もスムーズに解くことができるようになりました。この1年間、後期は授業のほかにほとんど毎日図書館に友達と通って勉強しました。中国語を学びたいという理由で留学に

来たからといって、決して楽な勉強ばかりではありませんでしたが、様々な人々と交流し、自分でも復習を怠らず、中国語の能力はかなり向上させることができたと感じ、今回の留学の結果としては満足しています。

次は、このレポートの本題である、私がこの留学を通して学んだことや、そこから考えたことについてお話ししようと思います。サブタイトルにある、「中国が都になるまで住んでみた」というのは、私が中国留学を始めた時の一つのスローガンでした。留学する以前に、私は計4回中国を訪れました。しかし、不慣れな文化や生活様式などが多く、留学前はその部分に自分が適応できるのかという点がとても不安でした。日本には「住めば都」という諺がありますが、10ヶ月という長期間中国に住めば、私にとっての住み心地のいい都になるのではないかという期待と、留学前の不安を打ち消すため、住んだらきっと都になるはずだという願掛けや、自分を鼓舞する言葉、または中国が私にとって都になるくらい、現地の生活をそのまま体験して、中国人になったように生活し、文化的な側面の理解を深めよう、という意図を含む言葉でもありました。実際、これまでのレポートでも紹介したことのある昼寝文化や和式トイレなどの生活文化を実践したり、または広場で踊っている人々の中に入って一緒に踊ったり、中国独自の祭日を現地の人々の方法を模して祝ったりと、ほとんど中国人と同じように生活することができました。そしてその生活の中で、こちらも以前のレポートと重なる部分がありますが、人々の様々な物事に対する考え方の違いやその根本にある価値観の重点などがどのように形作られ、また移り変わっているのかという新たな発見や知識を得ることができました。しかし、その実践を10ヶ月間通して私が最終的に学んだことは、「異文化に適応するって、とてつもなく難しいんだな」ということでした。10ヶ月中国に住み、和式トイレもお昼に長い仮眠をとる文化にも慣れました。しかし、中国が私にとっての都になったか？と言われれば、胸を張ってイエスと答えることはできません。今まで持っていなかった生活や文化を取り入れると、確かに新たな視点が生まれ、見えてこなかった様々な要素、そのメリットやデメリットを知ることができたのは紛れもない事実です。ただ、それでも私は洋式トイレがあったらそちらが良いと思ってしまい、仮眠で昼間の活動時間が削られるなら、昼寝はしないで夜に長時間寝るのがいいと考えてしまいます。最も身近でよく感じていたのは、毎日の中華料理の食生活です。毎日美味しい中華料理を食べることができ、私の口は中国人の口になったといっても過言ではないのですが、しかしやはり、母の作った唐揚げが何度も恋しく感じました。こんなにも濃い10ヶ月は、やはり私の日本で過ごした23年には勝ることができませんでした。しかしそれがこの留学を通して得た一番の学びだと、私は確信

しています。異文化の中で生活したり、今まで持っていなかった多角的な視点や文化を自分のものとして受け入れたり適応するというのは想像の何十倍も難しく、容易なものではないということを、身をもって知ることができました。

この1年間、留学生の一員として、他の世界各国の留学生と共同生活をしました。留学生の共同生活、それはまるで、現在のグローバル化が進んだ小さな世界の縮図を見ているようでした。たくさんの常識や価値観がぶつかり合い、特に留学を始めた当初は毎日何かしらのトラブルが絶えない日々でした。例えば、留学を開始したばかりの時、私のルームメイトはとある宗教に属す学生2人で、彼らと一つの部屋で暮らしていました。近くの部屋にはまた違う宗教の学生と、同じ宗教でも宗派の違う学生が一つの部屋で共に生活していました。しかし宗教と宗派の違い、もしくはそこから来る価値観や生活様式の違いから、ルームメイト間の関係がうまくいかず、私は無宗教の仲介役として、何度も部屋を変えなければなりませんでした。最終的にルームメイトは固定され、部屋変更のトラブルは収まりましたが、それでも最終的に100%全員が納得する部屋割りにすることができたのか、私は自信を持って答えられません。多国籍の中での生活は、このようにたくさんの常識が交差し、それによって多くの問題が発生しました。また別の日には、共同のキッチンに鼠が出たという状況に対し、そのような衛生環境に許せない学生と気にしない学生の間で対立が起こったり、その他の問題でも、WeChatのグループトークで、もしくは実際に廊下で口論が発生しているところも目にすることがあります。キッチンの鼠問題については、どの程度の衛生状態までなら許せるのかという衛生観念の違いからきています。

また、「衛生観念」というテーマについては、私も以前中国の和式トイレについてレポートを書いた際に触れたことがありますが、その際書ききれなかった部分をこの場で補足しようと思います。以前のレポートでは、「中国では洋式トイレは肌が接触するため、不衛生だと考える人々が多い」と紹介しました。そのため、多くの中国人にとっての洋式トイレに対する印象や使い方は、日本人の常識的に考えるものとは大きく異なります。中国人の友人から聞いたことがあるのですが、少なくとも彼女の周囲の中国人にとっては、洋式トイレは便器の上に足を乗せしゃがみ、用を足すのが常識的な使い方と考えられているそうです。そうすることで皮膚が便器に直接つかないため、彼らはそれがもっと衛生的だと考え、そのように使うのだと聞きました。確かに、女子トイレの洋式便器でも便座があげられていたり、上げられていなくても左右に靴で踏んだ跡がついて汚れている光景は、私も中国でよく目にしました。また、私は今まで空港などで「洋式便器は座ってご使用ください。この上にしゃがまない

てください。」という旨の注意書きや禁止サインを見たことが何度もあります。そしてその度に、誰がこんなことをするのだろう、「普通」に考えてそんな使い方をする人がいるのか？と不思議に思っていました。しかし中国の友人からその事実を耳にし、実際に中国に設置されている洋式トイレの現状を目の当たりにし、確かにそのように使う人がいることを、初めて知りました。これはそのように使う人々のマナーが悪い、ということではないと私は思います。中国ではそのような禁止サインは、少なくとも私は一度も見たことがありません。私が出会った中国人の友人の中には、それを「普通」の使用方法だと認識している人もいました。その全く新しい「普通」を知り、私が以前聞いたことのある、中国人のトイレに関する価値観と結びつけてその理由を導き出すことができたときは、なるほどと納得すると共に、とても衝撃的でした。

昨今、異文化共生は日本を含み世界の多くの国々で急速に進んでいます。その動きは、止まることなく発展し続ける社会の中で、経済や人口、社会インフラなど様々な課題に解決の糸口や利点を生み出す一方で、言語、宗教、価値観など、文化の違いによる誤解や対立を生む事例も多々発生しています。違う文化の中で生活する人々の常識、生きているリズムは全く異なるため、この現象は仕方ないことなのかもしれません。そのため、ある程度の範囲を網羅するルールは最低限必要なものだと思います。しかし、もしかしたら、この状況をそのように大きなルール一つで縛ることは非常に難しいことかもしれません。実際にこの大きな世界で生きているのは何十億のうちの一人一人の人間であるため、それらを一律に統制することはほぼ不可能に近いと思います。だからこそ、広範囲に影響力をもつルールをひとつだけ定めるだけではなく、そこにいる当事者たちが一人一人と向き合う必要があると思います。また、同じ常識を持ってしてもやはり一人一人が違う人間なのだから、そこにラベルを貼り過ぎないということも大切だと思います。自分が受け入れられなくてもいい、適応できなくてもいい、ただお互いにこの現状を平等に認め尊重しあうことが最も大切で、最も理想的な多文化共生につながる一つの道ではないかと思っています。

私が中国に留学している間も、政治上で日中関係が大きく緊張する出来事が起こりました。たくさんの知人から心配の声をいただきましたが、実際のところ私が実世界で直接的に反日思想や日中問題に遭遇したことはありません。私自身も中国人の先生、友人、その他中国人の人と接する中で、政治上の出来事を理由に相手を嫌ったり、問題が起きたりしたことはありません。それは私たちがお互いを1人の人間として見て、向き合っているからだと思います。この経験から、他人の持っている背景や価値観を認め、尊重し、その上で個人とし

て対峙するということが、最も大切なことだと考えるようになりました。日本と中国という国家同士にはいくつかの複雑な問題が存在します。しかし、私が中国で出会った先生や友人は「中国人」という一つの属性ではなく、それぞれ異なる考えや背景を持った一人の人間でした。国家間の問題を、そのまま目の前の個人への感情に変換する必要はないのだと、私は確信し、そのようにして異なる文化を持つ人々が共生し、現在の世界が形作られているのだと学びました。

また、留学生活の中で世界各国や日本について見つめ直すこともあったと、以前のレポートで記したこともありました。留学前はよく、「留学に行くと日本の良さがさらに見えてきて、日本がもっと好きになる」という話を耳にしました。それは確かにその通りで、先述した「異文化に適応するのはなかなか難しい」という点と結びつけることもでき、その意見自体には深く共感できます。私も、何度も「日本のこんなところってすごく恵まれていたんだ」と思う機会がありました。例えば商品やサービスの質、丁寧な接客や連絡などの安心感などです。ただ、それと同時に日本についての課題点も見えてきました。例えば、今まで気がつかなかった日本社会での同調圧力の存在やその大きさを、敏感に感じ取るようになりました。日本と比べて、周囲の目をあまり気にしないように見える人も多い中国社会では、女性が日光を避けるため顔全体をカバーするマスクを着用していたり、暑い日に上半身の服を脱いで闊歩する男性が頻繁に見られます。どちらも初めて見た時はとても衝撃的でしたが、しばらくして「周囲の人に迷惑をかけたりトラブルにならないければ、こんな方法も効果的だな」と考えるようになりました。やはり慣れないので驚きはしますが、日本で固められていた「普通の人」というステレオタイプの存在感の強さと、そこから外れると一気に人目を引く変人になってしまうことの容易さをよく感じた出来事でした。

また、私個人として海外の国や日本を見つめ直すことができるというだけでなく、世界が更に発展し、変わり始める様子を目にすることもできました。例えば、少し前までは、中国の高铁といえはたくさんの人々が賑やかに話している車内が想像されたのですが、最近は通話や大声での会話を控え、イヤホンを着用することなどがルールとして定められた「静音車両」の導入も、2026年2月から全国でさらに拡大しています。私も一度静音車両に乗車したことがあるのですが、中国の高铁とは思えないくらい静かで落ち着いた時間を過ごすことができました。この変化の原点には、中国社会におけるマナーに対する意識や需要のほか、他の国の先進的なサービスや他国との比較が世論を後押しした側面もあるとされています。たくさんの常識や文化が交差しあうことで、世界

がお互いに刺激し合い、より進化していく様子を目の当たりにし、このような現象も起こっているのだととても衝撃的かつ非常に興味深く感じました。

最後になりますが、この10ヶ月という貴重な機会をくださった埼玉県国際課の皆様および、常に支えてくれた家族と友達、中国で出会った先生や同級生、この留学に際し私と関わってくださった全ての皆様に心より御礼申し上げます。本当にありがとうございます。第三段落での経歴の話とも重なりますが、私は新卒就活をやめて、この中国留学に踏み切りました。しかし私は、自身で決めたこの選択に何一つとして後悔していません。この事業への参加は単なる中国語学習だけではなく、私にとって人生の大決断で、大変意味のあるものになりました。先述した多くの学びやそこから得た考えは、この事業に参加し、留学に来なければ得られなかったと思います。最後に、ここまでお読みいただいたみなさん、本当にありがとうございます。





山西大学での日常①②。1枚目の下段は毎日登校中に見ていた私が一番好きな景色です。

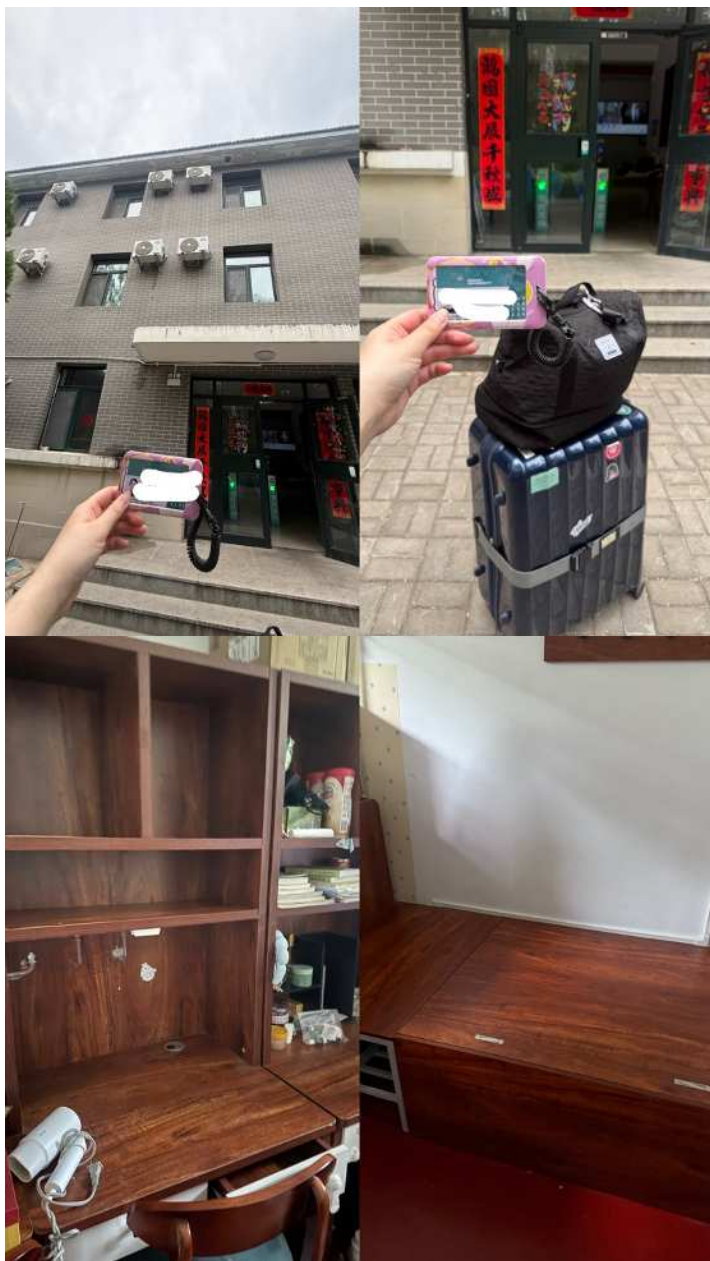


山西大学での日常③毎日本場の中華料理を食べられるのがとても幸せでした。



中国、その他外国を含むたくさんの国籍の友達と交流しました。喧嘩も時としてありましたが、総括してとてもいい経験になりました。





10ヶ月住んだ宿舎。中国を離れるときには、空になりました。